

■酒井抱一 絵師、俳人。尾形光琳に私淑し、俵屋宗達に始まる流派を“緒方流（尾形流）”として捉え、江戸琳派の祖になった。

さかいほういつ

1761= 神田小川町の姫路藩別邸で、老中や大老にも任じられる名門酒井雅楽頭で初代姫路藩主忠恭の三男忠仰の第四子(次男)に生まれる。母は大給松平家の出自で松平乗祐の娘里姫。幼名善次、実名忠因、通称栄八。

明和事件・1767= 6歳：父が死去。長兄忠以の嗣子となる。

1770= 9歳：

御蔭参流行・1771=10歳：母も死去。

田沼意次老中・1772=11歳：祖父忠恭が死去。兄忠以が家督を継いで、姫路藩第十六代藩主にばり、兄に何かあった場合の保険として、兄が参勤交代で国元に戻る際、留守居として、そのまま江戸住まい、しばしば仮養子に立てられている。酒井雅楽頭家は代々文雅の理解者が多く、兄忠以も茶人・俳人として知られ、藩邸は文化サロンのようになっており、兄の庇護のもと若い頃から文芸の世界に接近、

雨月物語刊・1776=15歳：兄忠以が始めた「玄武日記」にたびたび登場。

1777=16歳：元服。同年兄忠以に長男が生まれると仮養子願も取り下げとなる。この頃、大名の間で流行していた江戸座俳諧の馬場存義に入門、次第に遠祖酒井其角を追慕するようになる。

源内獄中死・1779=18歳：以降、古河藩主土井利厚ほかからの仮養子の話があるも全て断る。

1781=20歳：光格天皇即位の奉賀に上洛する兄忠以に同行。初めての上方行か。忠以に従い姫路国にも入って、

天明大飢饉始・1782=21歳：帰府。

蘭学階梯・1783=22歳：この頃から、浮世絵師の歌川豊春に師事し、師風を忠実に模す一方で、

意知刺殺事件・1784=23歳：この年刊行された山東京伝編「多南くひ阿は勢」に“杜綾公”として登場。

蝦夷初調査・1785=24歳：年記初見の内筆美人画「松風村雨図」、”屠龍”号初見の「布晒(調布玉川)図」を制作。

田沼意次失脚・1786=25歳：宿屋飯盛撰「吾妻曲狂歌文庫」に“尻焼猿人”の名で肖像と狂歌掲載。山東京伝作「客衆肝照子」に序文執筆。

寛政改革始・1787=26歳：兄忠以の日光社参に同行。宿屋飯盛撰狂歌絵本「絵本詞の花」などで活躍。「遊女と禿図」「花魁図」。

1788=27歳：喜多川歌麿画狂歌絵本「画本虫撰」に狂歌を寄せる。「美人坐狩図」。

1788=27歳：この間、「新吉原遊君立姿図」「盆踊図」「夕涼み美人図」「遊女と禿図」。

異学の禁・1790=29歳：兄忠以が急逝し、甥の酒井忠道が家督を継ぐ。句日記(軽挙観句藻)を開始、「梶の音」を皮切りに晩年まで記し続け、一つの軸となる。

松平定信引退・1793=32歳：

ポルト来航・1796=35歳：(軽挙観句藻)の「椎の木蔭」始まる。俳階撰集「江戸続八百韻」を編集刊行。

昌平饗始・1797=36歳：京都旅行、最後の上方行か。この頃、「桐図屏風」。西本願寺文如の downward に際して、入門し出家、さらに九条家の猶子となり、武家の身分から解放され、以後、市中に暮らす隠士として芸術や文芸に専念。

古事記伝・1798=37歳：「元禄美人図」。軽挙観句藻の「千つかの稲」始まり、初めて“抱一”号、以後終生名乗ることになる。谷文晁・亀田鵬斎・橘千蔭らとの交友が本格化、葛屋重三郎の吉原連とも深く交流。

伊能測量始・1800=39歳：橘千蔭賛「住吉太鼓橋夜景」を制作。

宣長没・1801=40歳：「立葵・百合図押絵貼屏風」「燕子花図屏風」制作。光琳・乾山風による有年記のもっとも早い作例。

膝栗毛始・1802=41歳：谷文晁らと常州若芝の金龍寺で蘇東披像を閲覧。

アサカ船来航始・1803=42歳：江戸島神社の「亀図天井」制作。

1804=43歳：骨董屋佐原鞠塙が、事情あって引退し、隅田川畔に梅園(のちの向島百花園)を開く際、ともに付き合いのあった文人仲間と支援、数寄屋(のちの御成座敷)の設計までしている。

青洲麻酔手術・1805=44歳：(軽挙観句藻)の「潮の音」、続いて「紙きぬた」始まる。この間、度々転居しながら、

バゾノ報復・1806=45歳：宝井其角の百回忌にあたって、肖像画幅「其角自画像」を制作、そこに其角の句を付け人々に贈る。

ウツク船狼藉・1807=46歳：「亀図額」制作。光琳の遺族小西彦右衛門方守に手紙を出し、遺作や家系を照会して以降、研究本格化、

フェイト号事件・1808=47歳：(軽挙観句藻)の「需きぬた」始め、(軽挙観)号初出。

浮世風呂・1809=48歳：下根岸大塚村に転居し、以後定住。(軽挙観句藻)の「京うくひす」始まり、鶯の里にちなみ“鶯邨”号。

1810=49歳：(軽挙観句藻)の「花ぬふとり」始まる。吉原の大店の花魁(小鷲)を身請け、以後、同棲。小鷲賛「墨梅図」。

ゴロウニ拿捕・1811=50歳：大田蜀山人賛「牡丹黄雀図」制作。(軽挙観句藻)の「梅のたち枝」始まる。狂歌においても、グループ内で一日も二日も置かれており、

高田屋拿捕・1812=51歳：渡辺南岳筆「玄宗貴妃一笛双弄図」(亀田鵬斎賛)の箱書を執筆。自選した俳諧集「屠龍之技」を編集し、

浮世床・1813=52歳：大田南畝跋・亀田鵬斎序で刊行。一峯斎作「葡萄蒔絵硯蓋」の下絵。(軽挙観句藻)の「放鶯処」「氷の枝」始まる。*光琳研究の手始めとして、尾形家の系図に既存の画伝や印譜を合わせ一枚刷「緒方流略印譜」刊行、基本情報を押さえ、宗達から始まる流派を“緒方流(尾形流)”として捉える重要な方向性を打ち出す。

黒住教・1814=53歳：「妙音天像」(題字小鷲)制作。「洋大図絵馬」を依頼主の八百善四代当主が西新井大師に奉納。

1815=54歳：「波濤図屏風」。(軽挙観句藻)の「遷鶯」始まる。光琳百年忌に当たり、光琳の庵居で法会を修し、付近の寺院で光琳遺墨展を開催するとともに、縮小版展覧図録「光琳百図」と「尾形流略印譜」刊行。研究が一気に進み、絵師として大きく成長、「花瓶図」をはじめ、“光琳忌百幅之一”の印をもつ作品多数を描き、独自の洒脱で叙情的な作風を確立し、いわゆる江戸琳派の創始者となって行く。

伊能測量終・1816=55歳：「柿図屏風」「四季花鳥図屏風」。(軽挙観句藻)の「春鶯囀」開始。鞠塙を京に派遣、光琳墓を修復させ、遺族小西家からのお礼か、光琳下絵380枚を受け取って、研究はさらに進む。

杉田玄白没・1817=56歳：小鷲剃髪し、妙華尼と名乗る。「宇治坐狩図」「青面金剛像」。「鶯邨画譜」刊行。根岸の隠居所を工房とし、“雨華庵”の額を掲げる。古河藩お抱え蒔絵師原羊遊斎と組んで、自らの下絵による蒔絵制作も本格化。*代表作の銀屏風「風雨草花図」は、俵屋宗達に影響を受けた光琳の金屏風「風神雷神図」の裏面に描かれた(現在は保存上の観点から別々に表装)。続いて「風神雷神図屏風」「三十六歌仙図色紙貼付屏風」ほか、

水野忠成老中・1818=57歳：酒井鶯蒲を妙華尼の養子とする。「四季花鳥図巻」「青楓未楓図屏風」。(軽挙観句藻)の「藪鶯」始まる。

群書類従完結・1819=58歳：亀田鵬斎「寒山拾得図」に著賛。妙頭寺本行院の光琳墓の修復のため、菊塙らを派遣し、

1820=59歳：完成。「雪月花図」制作。後援者の豪商森川佳統夫妻と向島で乾山焼風の陶芸を楽しむ。

伊能図完成・1821=60歳：(軽挙観句藻)の「谷の戸」開始。神田明神に奉納された原羊遊斎蒔絵の俳諧額の下絵描く。原羊遊斎作「蔓梅擬目白蒔絵軸盆」の下絵制作。「紅白梅図屏風」「月に秋草図屏風」「絵手鑑」。

英船浦質来航・1822=61歳：八百善主人編「料理通」初編に「蛤図」描く。(軽挙観句藻)の「うくひす笛」開始。この前後、「八橋図屏風」ほか「桜図屏風」「白繻子地梅樹春草模様描絵小袖」など、

シボノ来日・1823=62歳：(軽挙観句藻)の「やふとり」開始。「十二か月花鳥図」「芭蕉翁像」制作。光琳の弟尾形乾山の墓所善養寺を知り、墓碑建立、併せて乾山の作品集「乾山遺墨」を刊行し、墓の近くには碑を建てた。

シボノ鳴滝塾・1824=63歳：「白梅図」「日課観跨図」制作。(軽挙観句藻)の「隣家鶯」始まる。「集外三十六歌仙」。晩年は集大成となる「十二か月花鳥図」の連作に取り組む。

異国船打払令・1825=64歳：水戸侯に扇子10本献上。西村貌庵編「花街漫録」(鈴木其一挿図)に序を寄せる。「絵手本」七巻制作。

1826=65歳：(軽挙観句藻)の「竹鶯」開始。遊女玉菊百年忌に、追善の「百羽孫」刊行し墓碑建立。「光琳百図」を追補した「光琳百図後編」二冊を出版するなど、光琳への追慕の情は生涯衰えることはなかった。

日本外史・1827=66歳：「鶴懸松図」「丘節句図」制作。(軽挙観句藻)の「月日星」開始。水戸侯の茶会に招かれる。

シボノ事件・1828=67歳：水戸侯の新殿富士見の御殿の茶会に招かれる。絶筆「寄書述懐」の四句を遺して、雨華庵で没した。

インターネットWikipedia, 新潮日本美術文庫「酒井抱一」。鶴山裕司ホームページ「言葉と骨董」で追補。